



June 20<sup>th</sup> 1882 - 10 a.m. - 10 miles  
S.E. of W.L. - 10 miles S.E. of  
W.L. - 10 miles S.E. of W.L.

W.L. - 10 miles S.E. of W.L.

Alt 1

W.L. - 10 miles S.E. of W.L.

Alt 1

W.L. - 10 miles S.E. of W.L.  
W.L. - 10 miles S.E. of W.L.

W.L. - 10 miles S.E. of W.L.

Alt 1

此書表書、題簽、外題も古文  
文解等、冬日註あり。訛詣冬日註と  
ある所は、訛詣、瓢猿著註と要す。冬日註  
も、宋之谦著者吳り。又、元祐天保七年と  
あり。此書文化廿一年、堅之著。而者吴美

訛詣、瓢猿著註

濃淡の  
人の著

中村  
俊定

水石文庫記

本書は  
文化土  
甲子年  
下旬  
劉春山

中華書局文庫

朱書白水  
ペン・ヨウ・ス・ホウ

其

水  
江  
東  
流  
通  
利

まほよし  
春の花の如き  
けり解く  
やうやう

其一  
高野山のあまくわきの西行  
本のゆゑにまよひの地  
すまきものゆれとよし

翁

月待て  
官人を  
あるを  
すまし  
太刀を  
とす  
定め  
たる  
大刀  
を  
とす  
月待  
て  
内  
幕  
入  
れ  
鹽  
太刀  
を  
とす  
内  
幕  
入  
れ  
鹽  
太刀  
を  
とす  
元  
三  
一  
章  
集  
雲  
頃

卷之三  
新編  
三十六  
卷之三

宮司はちゆの本てよきよ  
考究の生うれの室に  
御神事也

前の壁を  
空と信鬼あれど  
の見えもとうる  
て其はなきタまふとほれ

前  
山の風景  
は、其  
の中の山伏のね  
古きまきを付  
てゐる一脉  
中  
山  
伏

秋の歌  
詠に歌  
幽かき  
ゆめよ  
奇発  
言ふる外  
心ひし  
りか  
上心ひし  
哀春化も  
句面そが  
守らざま  
人白レ

まえへ其へて  
執事のあすり  
立つたるの体

國  
家  
事  
業  
也  
是  
我  
們  
的  
事

おまかせの事の  
と詳白で通じ  
次も前を取  
るのを教へ  
て付書を取

の用ひる現の油とを云ひ  
色情也其也家はおひて世情人情の事  
秋風の形をこころやすむ

豪傑の事す  
かの邊の氣色と  
白子毛衣  
伊勢の毛衣也

和

まけうちあ  
くわじあ  
せうじあ  
せうじの

一四二五

午 郡 よひ 礼の事の 一日

水 破

かくはあらわす  
日つまほるえり  
河すよ  
あひのくはれをえむに  
えいとめとめ  
かくはあらわす  
日つまほるえり  
河すよ  
あひのくはれをえむに  
えいとめとめ

前の事務は今  
何事か

田舎子の歌  
歌詞

孫 简



まことにあり人の  
ハラミの肝と  
ハラミの肝と  
人せよほりよる  
口  
小てこめ御肝と  
硕

○文政十三年には  
○魚住の通日記  
○此名は所内山號  
明あたまとて  
前々の人にいへ  
自徳の袖日記より  
玄化者のものれど  
のうのり柄よせん  
近くせのよせるやく  
一考の事なりが爲ハ  
自由他有明はして  
つ元は南寧の上つ  
は一ゆす大なるにせら  
らじて云はば玉壽第  
の見物のあらう西の  
方當れだるる  
花木を  
おもねはき見る  
宿

寅三の地を  
近く此色  
人草のありて作風也  
寅三利歎と  
陸之名刻す  
メの跡也  
かひうらの筆者尾井の筆ひよすまし  
水

前人奉手  
さうと廟壁の巴  
藝とハ君すよラ痕とスミテ  
ある事者墨  
花は見れぬと  
すく宣子を廟先までひきと轉  
まざります

卷之二

١٤

其一

出で、は立候  
之の如く、所破の事  
は、多き事也。而して、種類の事也。  
其の、氣への迷ひ  
引かれ、事のいふ事もあらず。  
を常へ、事とされ  
れど、所は、別に、事  
は、其の、事もあらず。  
とえ

打野里も花の  
川原にて  
春水

寒風の心を  
もよおせ  
鳴鳴と  
喜(五分喜)

色多きもの  
引立つ  
字の筆形  
類似の字  
用例

の名ゆ  
きじと等  
て此の  
御所は  
御内閣  
の事  
の事

まことに  
まことに  
まことに  
まことに

はるかに  
見ゆる  
事無く  
のむ  
とぞ

26 30 15  
27 31 16

卷之三

官主の御用事と  
あまよひを也の事の通じて此處  
スル所の候也



おとと紙を  
臺すと云は  
て一脉と  
元の赤川は  
雪舟  
達

家もかわの  
言ありまどり  
て其のわがやのえの事

富貴の其の  
形をとる  
生朝の雨の聲  
珍

おはすにキビタケで  
黒口たまご  
不向のこどもをり  
おひるぬきのま  
引ばく立はせら  
す

字識づき人  
の事と云  
ふ事と云  
不自のと云  
事とあるま  
事ばん事は  
事と云  
事と云

3色の毛糸と毎年やるのをやめようと思ふ  
やめようと思ふ

あらのまがさと  
おもてはまく  
腕相撲とる

實見はあらわ  
一  
のやうな  
事のやうな  
覺えと見て  
人を  
云ふ  
情を  
外見で  
見ゆる  
事

1897  
Aug 25  
W. H. King  
and wife  
and son  
and daughter

卷之三

まことに其處で うとんす匱のこづみの日。お

里はつねの家政

の事へ 萬葉よりどんハ對のとかて

字もい共もり 有す オ子供の体もる

体の曲毛已

「 」 おの子の比翼印

也

まつて都へと  
の酒をすき

「 」 もや前意ととて

の酒をすき

記明くさり  
あそびに

ある事事と 「 」 おの前意ととて

の酒をすき

「 」 おの前意ととて

の酒をすき

とゆくとゆく

字もい共もり 有す オ加減又とゆくとゆく

參

字もい共もり 有す オ加減又とゆくとゆく

參

字もい共もり 有す オ加減又とゆくとゆく

參

也



富士山の宿泊

あまねくやうからひあす

はとすれどもおきに家をあさむ

暮るまか夜

暮るまゆいへし方

翁

暮るまか夜

かづね音の和すのみ

翁

暮るまか夜

女郎ひの細井すまほ

翁

年

實るまち

日

かくのやうす

破

實るまち

今

すまく河原せよと見る

里

とくとく

今

すまく河原せよと見る

里

の其角  
の神事

士

まことに御のぞ  
いさと云ふ事  
思ひあつておま  
るる事

馬上 佐々木 信政  
（さざきのぶまさ）

ب

宝鏡山の下に人あり

一里

山  
火  
土

卷之三

みどりの葉の  
岩の縁  
ててて

家  
國  
之  
大  
事  
也  
不  
可  
忽  
視

右の如きは、左の如きの、  
敵力の多くあるもの、  
思ひやうが、必ずしも、

174

のふるみ  
日暮とくらし  
おもてなし  
おもてなし

山  
水  
之  
流  
行  
也  
其  
所  
謂  
水  
者  
非  
水  
也  
而  
是  
天  
地  
之  
靈  
氣  
所  
化  
者  
使  
然  
也

卷之三

玄武山中  
望天柱峰  
已卯仲夏  
宜興人  
徐陵

雪舟ニシテ也。也の事也。子  
ニシテ也。也の事也。子

乙  
廿

宣德  
清空  
月光  
掩映  
因家  
其也

同居の左近とおへすをせ  
うらわせ

卷之三

家主の  
お墨子  
の声

東山の都也す  
都を思ひやうす  
おもひやうす

卷之三

寅三月廿五日

日向庄内

改稿

寅三月廿五日  
日向庄内

改稿

寅三月廿五日  
日向庄内

改稿

寅三月廿五日  
日向庄内

改稿

寅三月廿五日  
日向庄内

改稿

寅三月廿五日  
日向庄内

改稿

改稿

寅三月廿五日  
日向庄内

改稿

改稿

寅三月廿五日  
日向庄内

改稿

改稿

寅三月廿五日  
日向庄内

改稿

改稿

萬葉集卷之四

鞆剛生於者又事を即在あり

泥土

信嘉主子近仕と之

前半作

八月ニ草収日生す

名は

名の宿日也

作すキラリ

名は

名の宿日也

名は

家主の名す

看地の吸

まきし味え聲

里東

名は

五是あうの

人きく音す

四十は老す年と聲

音す

名は

其ノ事と之

四十は老す年と聲

音す

愛廻子枕の事と聲す

名は

其ノ事と之

四十は老す年と聲

音す

愛廻子枕の事と聲す

名は

解と謂ふゆゑす

解と謂ふゆゑす

解と謂ふゆゑす

解と謂ふゆゑす

名は

解と謂ふゆゑす

解と謂ふゆゑす

解と謂ふゆゑす

解と謂ふゆゑす

名は

安主の事と之

安主の事と之

安主の事と之

安主の事と之

名は

安主の事と之

安主の事と之

安主の事と之

安主の事と之

名は

詣古事と之

詣古事と之

詣古事と之

詣古事と之

名は

詣古事と之

詣古事と之

詣古事と之

詣古事と之

名は

其の

其の

15  
乙

寫了。顏色。

卷之三

卷之三

拾  
老

富士山は大雪をかぶ  
布被をかぶると己  
にさす寒風を吹く月はかくも

アリナリ  
アリナリ

萬葉集

卷之二  
通鑑

卷之三

其の後新月  
夜は（高）  
おうやく船と云ふ  
（天狗注）

風炉

卷十

及肩

家主はもとより  
往々の事あるべし  
するに足りず  
一朝てはるゝ事  
其の作事節とす

風炉を以て  
あらへ夕歌とし

まことにあり  
正月酉の都を  
猪と見て御子とせむ  
やうも春牛をすばし  
ちゆる松と新木  
立とあすと外を  
かまくと外を  
すきの事すこは  
雪のやうのやうの唐

地酒

おとを草うねる  
くじて起る  
御まなせ花

放ひよのを松居(生)

室主とあらゆる  
御事とあはれ  
おうの事と會すてうふあはれ  
おこえの家事管  
経をとぞり  
牛の草りの事と  
おひし事とあはれ  
すきの事とあはれ

十六

寒風と其の  
あをえ折り月

「鏡」の中  
音下生日ゆく

正季

の景中色を「かくす中」より月見るにうて休す  
中身はあらの空船と見て且<sup>ハ</sup>はまうて

其のうえを

すく上

あめ母

天女

風雲

夜

音

宣うよ其母。

益々

事つまゆ

所ゆふ

今も未

達

音

石やア妹

野郎

と

かくす

の

新のすと

元氣

西國下りの在郷

雀

と翁ふ

朝のちめ

の

新のすと

元氣

あらと羽

野郎

と

かくす

の

新のすと

元氣

あらと羽

野郎

と

かくす

の

新のすと

元氣

○文政元年秋  
道彦の監写(表七)

鉢と坐てし

是立まみ

え毛と見て

鉢

去ひあらふまうのせり有

前

立あらす

間の來門の体と似てありのうと見えま

探志

黒東

宝

天

月

日

月

日

月

宿すとある事  
院と申す所す  
月はうなづき  
キラヒテリツナリ  
アマミハムク  
日はあたる共  
ウタヒテリツナリ  
ウタヒテリツナリ  
老病の人と見  
草の子と見  
宿すとある事  
院と申す所す  
月はうなづき  
キラヒテリツナリ  
アマミハムク  
日はあたる共  
ウタヒテリツナリ  
ウタヒテリツナリ  
老病の人と見  
草の子と見  
宿すとある事  
院と申す所す  
月はうなづき  
キラヒテリツナリ  
アマミハムク  
日はあたる共  
ウタヒテリツナリ  
ウタヒテリツナリ  
老病の人と見  
草の子と見

家はたすも家主正五角  
嘘なりと  
御て御方  
御に面上

立つはひき最上侍  
宝珠の人に  
あるを盐て下る。以日最上共侍も  
ハ其事上へ御て侍ゆ。乞下すより後して  
く又うそ又思とよみえ五縫もよし。其事上  
あつも一きらすきてるりを。やとあるも二八斗の女  
店のことはありう。ゆきあうが不やの。(とはすすまな  
けと見て。以侍ゆのと嘲る。よしとづきよきて。其  
直ちん其女を有す。アガ基代と見ゆ。事  
場うけよりうり。都女の人さす。思ふ。すますます  
なす。おきまとと。ちかく。アガ基代と見ゆ。事  
信義を。娘家を。もつ娘も出で居り。アガ基代と見ゆ。  
宝珠のと。くみ。かんを。城ねを。腰。まく  
最上侍と。ま。アガ基代と見。かく。と。ま。し

宝珠の腰子  
城主一人ぬ  
を根葉をく  
物てアガの仕とよ

宝珠の腰子  
城主一人ぬ  
を根葉をく  
物てアガの仕とよ

○萬葉の角  
磁出の角

ちゆい  
一天の説

七部被

涅槃經  
代の事  
かわ  
かわ  
かわ  
かわ  
かわ

寛保年三月十五日  
正秀

○天皇一月七日  
正秀

筆者著  
毛毛の氣  
色打ほと云  
し

九不立  
地氣  
九號

珍頤

全秀

久志の人に  
えそくは  
うかのすら  
の家算のれ

日記本  
今朝は朝夕  
山中で見事  
の雲海を  
構へるか  
と見ゆ  
た。内と外  
は利久  
の事

全

心經解說

(王德林)

卷之三

草の一字三二へ  
一九三

井と黄はる

珍石

水  
下  
一  
之  
之  
之

宝珠は華やか  
とびておやさしい

W. H. C. T. W.

正秀

卷之三

中興之時，

セシル  
同上  
の本領をあ

珍  
藏

立馬の事

正秀

文七石山高  
游  
游  
游  
游

一  
打  
六  
十  
六

立  
定

卷之三

卷之三

原  
シテ  
付  
空  
付  
と  
あ  
レ

四

卷之三

秋ニ至風の  
体とて更太  
走のねとす

門廣とせんの看板を董所

正季

前々の宿を給て  
付さう詣曰く  
の如くすきの件をすゑあひる作の御宿として其傳を

珍碩

宣ミ「前々  
宿をとあるの  
事きナリとす」

同 あらゆる空の理

正秀

前々の宿をと  
の事中のが  
ちもと御事もまもとす

正秀

珍碩

宿をとあるの今  
の事中のが  
ちもと御事もまもとす

正秀

對付

珍碩

愛一と金ふる  
人と前々の件と  
人方子と野郎  
は鹿化けの事  
をばく馬鹿  
宿をとて鹿實の事と  
宿をとあるの今  
の事中のが  
ちもと御事もまもとす

正秀

珍碩

愛一と金ふる  
人と出たる事  
見て其をソ  
ロトナキと  
アモリナシ  
ヘモチホトイシ

正秀

珍碩

愛一と金ふる  
人と出たる事  
見て其をソ  
ロトナキと  
アモリナシ  
ヘモチホトイシ

正秀

珍碩

寺本堂

宝の玉と金の  
寺本堂と御所と 天を吹くの 梵門の御所  
はまだ荒壁の 壁構造で空き地  
御所は皇帝に 中奉り女帝に 珍重  
其處御立をさせた 王室の御所を御立

正秀

168

宝玉と金の  
寺本堂と御所と 天を吹くの 梵門の御所  
はまだ荒壁の 壁構造で空き地  
御所は皇帝に 中奉り女帝に 珍重  
其處御立をさせた 王室の御所を御立

正秀

は嘗てゆきゆきと内侍あり

あるとおもひ  
毛色とまことに 本堂のやせな板牆を枝み盡  
甚草の付とよア

正秀

宝玉と金の  
寺本堂と御所と 天を吹くの 梵門の御所  
はまだ荒壁の 壁構造で空き地  
御所は皇帝に 中奉り女帝に 珍重  
其處御立をさせた 王室の御所を御立

珍重

あるとおもひ  
毛色とまことに 本堂のやせな板牆を枝み盡  
甚草の付とよア

正秀

黒川之子  
の爲屋正之  
下に今細川  
を領す西  
より也あ  
れと云ひ  
て居し。財  
物此岸とよ  
きをもつて  
人、舟

正義

黒木文正の件  
一歳の行ゆたて自ら従事  
下に今細川直綱す西予の地也まふよ  
カトリスルが如くは10を限り。射水岸とよえむ  
人舟

家主もす  
馬鹿工ひくおまき

私行焉の事ある所  
素すすいとよ宿す  
家主の部  
山はあめ  
てつちう  
あとRうつて三月と野  
宿すいと  
てうち年  
年子と下捕を五人  
けいとく作のやうみとく

趙雲  
王蒙  
王頤

珍藏

宣焉、ちう  
猶々あり、ヒ  
ちうり其博を  
仰ぐ人町へナ  
と見て乍作候め  
宣焉、まうる  
少くのまよの  
リ人町のまよの  
ちうりとくちう  
詳曰、すれ、志つくりと其博完ら  
あ、宣焉其博を定めり

宝鏡の頃  
己は往來  
群衆の移と隨り  
ねるる雪踏引つきやリ  
珍碑  
寒風よヌ  
其端をあら  
1月大いに雪のす  
正義

大正五年正月一日  
正月一日

晋书序

宋之卿爲子雲  
所見

此等の事は、  
其の後英國の伊賀者  
が、日本を訪問するに際して、  
日本をよく見下す言葉を用いて、  
日本を攻撃する事を企てたのである。  
これが、日本を攻撃する事の始まりである。

日立縣  
北山行司  
印

日暮の筆者  
筆者は次へおもな考  
甲に会相と申す物  
東北の山野と申す  
其う況へて  
竹子の如く  
人うそりて不まゝ實と謂ふ  
爲す所を今の序句と取りて文對とする  
不流れたりと申す  
あよどし草木の間  
みる考る。拘る所を除く  
ひきと一馬をすり起し  
まよひす。と申す  
まよひす。  
佛淨。かく三度ヒ釈。

はるかに其の心を知りて、其の言ひ事はるゝ事の多くは  
實に嘆かわしく、其の如きは、所ぞうぞ大  
丈じうしやうの心が、人所と云ふ事は、歌道  
の如くと云ふ。之詩あつれ意を人よひつて、云々等す  
西上人よひて、其の如きを、想ひ骨の人へ、ちひす  
是とえひのえきの曲也と云ふし、直人、毒人、歌道  
のみ術よしむ術をさへとて、其の如きは、骨もて作  
人有とりて、上りて、十日もあそまぬ人、十日もあそ  
まぬと、多めの要句

禪說曰。空石人半疑知一丁。

又おまえが、絶命一筆の御墨を、  
おこで御盡の御事、お御身、  
お人。併とて、おもよおもよ了御  
了上、おて了上をつましが、  
内林の宮、おおせじ

説曰 萬葉(甘) 五ツのものとあるといひて法の  
東國の病床よ りうきんじそや  
休ておおむか帝  
熱歎(一) 万葉の姓をもあつてはれ  
不言不笑と云々

五ツの手の事も  
やうやく仕合  
次の仕合

不言不笑 一  
日未盡

卷之六

説書の事  
七時頃に起  
著述の事  
云所が十二  
月一日の意  
の如き大いに  
お詫びせ  
まほしと申  
す

詳曰「序記」  
「あゝや強のうれてす月 基南  
をまく清るそと秋水と立すよへるの岸」  
「山に上立すの波内をよ花をす空とてこい  
すすきみ月のゆき里すを海を海をよし」と

詳曰信の即  
「雪もせぬ家よしの花」  
翁  
翁の居候家よしの花也とすむとてお費  
備すすま  
「雪もせぬ家よしの花也」の花もす  
ちよめま尋りてされば

詳曰枕さし  
「裏をすかみす一庵のそ  
とあ門内を葉も  
のそひのりと同はせよ」はすむかわらん眼半と拂  
上へといづくかん——入らかのとが

同

○白氏文集

遺愛をよ隆「枕をすかみすのそひのそと  
かけしるはれはと云ひて裏をすかみすけ下庵  
のそひとをすかみすのと皆解とまし

此の語りを  
起すとつて  
古のきなを云轉ぐの作の儀と仰べし

基南

詳曰「遺愛」  
「枕をすかみすのそひのそと  
のそひのあはりを井のわくす御引ひておひをす  
せたかみすけ下庵のそひとすかみすのと皆解とまし  
此の語りを云轉ぐの作の儀と仰べし  
此をかみすけ下庵のそひとすかみすのと皆解とまし

三

口とせば行用和丸に

山里にはまだ誰

とすまつむかひす

すまんと思ひゆる

西にさりあり

とぞりのと

はくはくは

## 古事記古今事記人名

卷一

方山の山の上に

うきはくと拂

かくせむるをも

おのれの

朝雲

山下之鷹川津之比皆有當時先駆を欲得

説教の上  
かぎりをす  
すとせうわ  
のうせんせ  
いふよ

五  
七

吉川又  
一粒  
老けたりやうの氣  
あらゆるの實を傳へし  
五三日  
五三日

かくへまみゆき、世は三首あ  
かくまき、雪は三首あ  
まきやく、雪は三首あ  
みゆき、雪は三首あ

蝶の如き  
あらゆる所  
春と五<sup>は</sup>とて見る  
一作<sup>かく</sup>かくよ  
片<sup>かた</sup>のいは年々  
かくよる所は  
もとまきやうの跡<sup>あと</sup>と昔<sup>むか</sup>の  
湖<sup>こ</sup>のえみれ青<sup>あお</sup>とやうすに  
云<sup>い</sup>ふ事<sup>こと</sup>を知<sup>し</sup>る所<sup>ところ</sup>と云<sup>い</sup>ふ

哥山甚一

文元厚手  
炉病宣し  
の空とてき  
近註は集註  
の如く、さる古  
吉集并、古  
多氣、和経  
本古し  
墨のやくわ  
の月も羽毛刷  
備口絶作とま  
一便内  
のあひも  
一便  
眼、眞有  
氣色を活て打除  
てしも記、此法の前と  
云ひて云ふも考照へ陰陽合体より其時作の  
てみたる前後差別もあ  
或は眼はあつりと云う。又字玉爲色也  
下のよつこまも考字は字と斯く  
は考る者曰眼もあつたりと云々考字と云々考  
とはゆかひのうと云々考字と云々考  
と云ふ考るへ全體と云ふ考字と云々考  
きよめく考るへ全體と云ふ考字と云々考  
のよつこまも考るへ全體と云ふ考字と云々考  
のよつこまも考るへ全體と云ふ考字と云々考

○云々をかきそト  
天住の御祖に

此乃三國之始  
事之以三川之  
勝

凡  
非

やまと仕事の生れを二十九年まつはりと初め

おもむく水業  
をとむるよしと  
アラシ其の後  
アラシ其の前  
アラシ其の後  
アラシ其の前

○上陽人の屋の中には本門の昌の木、弓馬やりあり。天和三年庄栗主牛田の跋。夕景の卷。休。助理(元朝上、新始)。さきと山口。まつりふるまよ。さくら。月。スラ。家作。浦。一。くわね。す。△

卷之三

○明和元年、京都  
文鳴か猿袂義  
下老ハ  
東也ヒ可葉甘

子開(元七列聖學耳目之通者)

子の娘と極し數と了所  
ひ、度つまじき事  
革子の心はちゞの心拙く思ふしと  
親化の句あり、自強を角じての仰つたがめり止

○古事記傳  
日本書紀傳  
古事記傳  
日本書紀傳

伏見着二ふ先ひ悔子ア  
足袋つほ移行元  
元江歸多子、名月也  
シテ  
三

卷之三

卷八

三三三

芭蕉

おひの前かと  
大きみおきか  
芭え一みて年の風かく  
大あとの内考と不すくちり大考とまう修驗聖經  
の行とさるますに己の刺と幸て午の刺と下山ア其  
時喰風を午の日といひてす たます

「りづみ年の見にまつまれ羊のあゆめ」  
わは行を詠ことも

定まひあらわ  
今おまかん  
とえてやる事とちへし

定まひ極界、  
波と前より

足弓 芭葉の足弓とくとね  
画の弓と足弓の所が一とくら撰とすく

## 宝鏡

史邦

芭葉の足弓とくとね

吸ゆ處の密せ立せたる元七砂川集  
肥たの相伊を又開けで直ニウ

芭葉

風流とす淡々  
との處前とさくとくとすひせん一「芭葉」の處  
國の名をすすむをせやの院内に生す

去来

芭葉の足弓とくとねと密せ立せたる處  
カケあやとくとくと密せ立せたる處とて限ら  
かくあやとくとくと密せ立せたる處とて限ら

芭葉の足弓とくとねと密せ立せたる處  
と奉出人月りとくとくと密せ立せたる處とて限ら

芭葉の足弓とくとくと密せ立せたる處とて限ら

芭葉の足弓とくとくと密せ立せたる處とて限ら

次の音を包  
音と見て其  
中のせじへ「死の一字」の行の余歌

芭

さるの花の  
さくさくせし刃とすけさり肢を  
てあうやうかうの都、さう風流をもつ

吉永

あらのくわ  
まおとせんせし刃とすけよりの脚を  
金すあとも羽衣をまきは人のりよ船を下  
の煙をまわる  
のくまくま牛乳、うしの附を下して皆見ゆ  
さまよゆ

史邦

宝見り西船の  
目やくわどこ  
にの寺院のまよ

あるの西子  
み色えぬ

内子せゆ出舟

芭

七都波  
の夜船の  
の陳の  
を夕れのあ  
仲さうシト  
夕れに  
夕れに  
家をほめ  
都をゆき車引  
前をせ情  
おま

家主は「さう」とおきくと相談せりへじせん

とおもふと腰を

甚

家主は「おまえ

今や別の刀ナシ

の腰を

甚

口古集井に  
与集也、  
を改め名城  
少殿の御  
トアリ

宝主へ御  
前の方を身構

ミミズクの

世終ナヨ

脚を立

甚

甚

甚

甚

甚

口古集井に  
与集也、  
を改め名城  
少殿の御  
トアリ

宝主へ御  
前の方を身構

ミミズクの

世終ナヨ

脚を立

甚

甚

甚

甚

甚

甚

口古集井に  
与集也、  
を改め名城  
少殿の御  
トアリ

宝主へ御  
前の方を身構

ミミズクの

世終ナヨ

脚を立

甚

甚

甚

甚

甚

甚

我門ト仕

獅子門シ

二二脚の門ト高台ニテナリ。予は後くと/or/甚威シ故也。  
内宮陰陽宮神の御事をもととす。今六体ト。甚  
は足らず。目よりぬるを後。作者甚とえり。其の  
武者を前々と云ふ。かくは仰が。仰云ふ。甚と云ふ。  
後二方を全く。左より右。右より左。行脚の如き。か  
くは。後。左より右。右より左。甚と云ふ。甚と云ふ。

吉宗

天月・山空碧  
水流・空碧  
李白・謝空

前文元也よ  
先色を極む  
作の仰き大思ひ

御水の狀の比  
仰御水

月五日

宣月開  
蝶のやや暮るのうきを守るか

史邦  
住人のねどよし  
暮るをめぞすておとすひとまく不情の間者

史邦

貴人  
しき

布子着ゆゆゆゆゆゆ

凡兆

寢室あるの  
人と並んで  
の寝向ふうぢのうじゆけんと  
のまく純作とさへ

五  
未

○信濃のや  
の春かわえ  
(直ちぞゑづ)

○日の出る前の赤き冬を  
強烈(若宮)

宝室あるの

押合をなして又立り枕

のまく純作とさへ

人とのかねとくとくはまく

赤き冬を

凡兆

宝室あるの

人とのかねとくとくはまく

赤き冬を

凡兆

宝室あるの

人とのかねとくとくはまく

赤き冬を

凡兆

宝室あるの

人とのかねとくとくはまく

凡兆

宝室あるの  
人とのかねとくとくはまく

七  
上

七  
上

七  
上

七  
上

七  
上

七  
上

七  
上

七  
上

七  
上

あくはの新處とは物  
いのに物々々々傳とて林  
一でシ立に物見事とて  
私は新立物見事とて

去來凡北

銀庫目史王佩衡  
榮和(其後卷)

水子改寫  
乙酉一月  
付之  
此節  
予  
謂  
如  
此  
不  
可  
以  
也

大會の會  
之を作る  
事と會子事

すとひづれ  
しとおきく  
すれりて地  
とあるアボル  
さとと有ふよくなれ  
さとおきく  
すれりて地  
とあるアボル

家主の豪傑  
はりて中  
ああへ  
種子  
見え  
花の葉と  
力強  
ト

國の御は衣のことは  
トモトモと

前句の  
前句は鳳前より煙  
煙の花をもて下し  
煙の花雜の花也、う  
うは花をもて

凡  
北

聖集抄卷二  
總題  
佛洞山回互  
ノムの荒穢  
ノム島の見  
上人月廿日

行脚の事  
信者に思ひ出でし  
其とよせと洋  
絶作と云ふ  
元和七  
別床坐、身も心も  
住うとも住むる所  
身は波浪の事  
松風

○老齋待人<sup>の</sup>用とありてひこ通常のみ、らむと並んで  
めしし凡て仕うる事宣焉あるの  
也。亡<sup>ヒ</sup>程新<sup>シ</sup>手  
人魚<sup>人魚</sup>をもて  
魚の舟<sup>舟</sup>はまど老<sup>シ</sup>もて  
引ひ舟<sup>舟</sup>とよ一  
草堂

○老の待ての用とさうすりひに直事の事、而てす玉吉と三郎は  
ゆくし刀を引く者もあつた。宣焉あるの  
也。と星が少半程  
人魚翁をも  
魚の身へはまどよ老をもて 萩生  
草見すまよ  
金糸舟とよて  
○源、も鷦鷯  
出内つ伏  
審焉いは國  
門ちあは瑞み  
まよとづくねとかりてや門の隆をきよそゆ國の君  
を詔をやせし竹を鳥てはと云  
○えゆひの 立ゆる麻風を倒させずも 凡北  
君を立ましもんヒ  
女共の麻風を立ゆる麻風を倒はと云  
室生は草の國  
室の伏をも  
まろも一其傳の伏とアフテ  
○も

室主は差まゝ風とは木の事と他  
名の付きま  
まろも 茉律の付とアマ  
室主のちう 茉律 室主の事と  
ひく前主の付とあ

一宿金山寺  
水國分兒曾  
船月、龍出曉  
雲、雲、微茫夜

蒙古文

「何や なまこ おもて 部

凡光

三行  
金山寺  
宿  
月と  
船夜  
ゆき  
月の  
舟

詩曰  
信矣  
勿疑

國一  
也  
也  
也

卷之三

言葉が  
立って其  
て自由に  
かへる可

五十五(七百)

卷之三

地子とうなぎもあ

不

宝珠の書物  
竹とた窓口に  
墨のねう

3. *Thlaspi integrifolium*

宝を、  
あみとすと有  
あつあつる刀をもつてはとどく  
果ては自ら七歳が現れし事  
刀持の口でつやの音の如  
みよきよのれとて口立事  
一ぐでつちのみをひくゆと付  
のう、自ら其人の後二る者を見ゆりて脉こじめ  
三方甚き引とて其野々へ自らとては生れおぼる  
宝を、  
うちのまへ<sub>アヘ</sub>  
をえて其野々を尼所まで

芭蕉

讀書

家主はあらの  
妻や一きのを

天よりすかり

この色

王集

すまそくへりとく

と

家主は前るを

とて

年老と進るに

凡て

此の

費家の様をと

る

其人の手に作

すが

有る

と

置ゆる事

二うる姿形

其體

と云ひ有り

外れ

と

家主は其の

の体とて外

と云ひ

絶作と云ふ

と

言まひ甚也

の

身

とて

と

と

と

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

雜談集

何世の事は皆奇と云ふ其はは世の事も云ひ  
少物とも「其角の作をみてて翁の仕事  
如何の事かと云ふ

宝永世々向れを繕つゝ日久  
親方へう人のままで親方の仕事  
宝永年間同母をうめは傳被敷  
ヒズレ所

三葉  
芭蕉

○宝永大年妻  
初学刊四季詠  
初花見  
○花見の風  
元湖十上花堂  
云湖十上花堂  
かみ湖十上花堂

「其後是れ  
をあらわす  
一月十下

さとすとあきか  
さとすとあきか

其二

吉葉

○此にみ年の頃れす  
時より改すてる能ひゆけりと云ひ

虫、虫と云は  
也

美し、キリサ  
ヒタチ

心教庵翻

其のやうに

仄確のよトテナリ

前々のねる

裏も心に折

み又とちき絶作と云ひ

前々のねる

芭

固りて(逆志也)○俗に商人が品力で云ひ  
芭<sup>ア</sup>長<sup>アシガ</sup>(元一、芭<sup>ア</sup>長<sup>アシガ</sup>行ニオハ  
芭<sup>ア</sup>あま<sup>アマ</sup>芭<sup>ア</sup>長<sup>アシガ</sup>行ニオハ  
芭<sup>ア</sup>所<sup>アシガ</sup>芭<sup>ア</sup>長<sup>アシガ</sup>行ニオハ

其のやうに  
仄確のよトテナリ  
前々のねる  
裏も心に折  
み又とちき絶作と云ひ  
前々のねる  
芭<sup>ア</sup>長<sup>アシガ</sup>(元一、芭<sup>ア</sup>長<sup>アシガ</sup>行ニオハ  
芭<sup>ア</sup>あま<sup>アマ</sup>芭<sup>ア</sup>長<sup>アシガ</sup>行ニオハ  
芭<sup>ア</sup>所<sup>アシガ</sup>芭<sup>ア</sup>長<sup>アシガ</sup>行ニオハ

芭<sup>ア</sup>長<sup>アシガ</sup>

三つ頭合つてくと其の安寝か前二うと申す。おととと接はれて、  
アラヒトカシハルタヌキアリ。アリスアリスアリスアリス  
リ益は冥の物に各自ヲ波トナリ。未全十瑞モミツ瑞ナ非一  
○お古リ益の事と云ふ在道と西有

引益祝ミ、「まくして」と、十の益  
アリ益の延の延の延や

吉木

三つ頭合つてくと其の安寝か前二うと申す。おととと接はれて、  
アラヒトカシハルタヌキアリ。アリスアリスアリスアリス  
リ益は冥の物に各自ヲ波トナリ。未全十瑞モミツ瑞ナ非一  
○お古リ益の事と云ふ在道と西有

引益祝ミ、「まくして」と、十の益  
アリ益の延の延の延や

吉木

三つ頭合つてくと其の安寝か前二うと申す。おととと接はれて、  
アラヒトカシハルタヌキアリ。アリスアリスアリスアリス  
リ益は冥の物に各自ヲ波トナリ。未全十瑞モミツ瑞ナ非一  
○お古リ益の事と云ふ在道と西有

吉木

三つ頭合つてくと其の安寝か前二うと申す。おととと接はれて、  
アラヒトカシハルタヌキアリ。アリスアリスアリスアリス  
リ益は冥の物に各自ヲ波トナリ。未全十瑞モミツ瑞ナ非一  
○お古リ益の事と云ふ在道と西有

吉木

三つ頭合つてくと其の安寝か前二うと申す。おととと接はれて、  
アラヒトカシハルタヌキアリ。アリスアリスアリスアリス  
リ益は冥の物に各自ヲ波トナリ。未全十瑞モミツ瑞ナ非一  
○お古リ益の事と云ふ在道と西有

吉木

招持  
佛出観音  
百神車に  
馬の三輪を  
祈る蓮志抄

説法  
阿難

度母

度母

度母

度母

度母

豆山す再び  
正月もがけと  
津と作と云

豆山す再び  
正月もがけと  
津と作と云

度母

度母

度母

度母

豆山す再び  
正月もがけと  
津と作と云

豆山す再び  
正月もがけと  
津と作と云

度母

度母

度母

未兆直矢

日本  
花とそしよせと  
うて風ひか 伊賀  
竹の筒もぐく  
青柳  
あざやかな香の  
花月の香の

詣行道中  
生滅已  
江水無心  
惟學經

五  
九

蒙古文



宮主あると

満の席と堤す田の事やせこづくらふ

前も青田イ

加藤イ其と本社

云ひきとすし色立

甚毛衣水家所ちと玉賣呼

すりく御賣り林

宣見の旗すすみ金の三帝(王)

白毛とて甚口若を知つてのめり神と見てはなし奉者

風通とおの山の曲筋とが

北 蓝 水 木

あらのまき田連

のねうき中と登

空城す吉峰のさよ

正花と云ふ

正

花とまき田連

のねうき中と登

正花と云ふ

正花と云ふ

正

高麗の細  
キトキヌ  
物アリ  
(元有此註)

甚正花傷の

正花と云ふ

甚正花傷の

四十二

卷四

車諺  
轟口  
打門  
舊乞  
三州

也無事也  
萬物皆有裂隙  
人生也亦然

芒草

解説、筆者  
の筆を全  
て春の字  
からとす  
る。筆者  
の筆を全  
て春の字  
からとす  
る。

乙  
申

解、旅館の  
事ちすを全  
の事な」て春の一年もあらうと考へ  
た。服部紹介はおれに「おはるの娘  
と長きの間と  
て丸色のけ」説は  
て耳を立てるやうの如  
く、またおまでも限つてやうと云ふ事は一歩も無  
るじ  
室主いわく、  
「下り難いだとか  
染毛ヒカル  
室主「あき  
まじかく人と  
ぬあとえこ事人か  
ぬあとえこ事人か

是も大富  
人として生  
歩く所と見  
其のせいかの字  
の字は  
事もあま  
の事也。行の事も  
たまう。界山をやさし  
井の丸を  
事もあま  
燒の事のひの方をよめ  
事もあま  
事もあま  
事もあま  
事もあま  
事もあま

佐藤山は学業をまるで放て、家事もち縛る  
上に家をもつて其へ仕とが

の行を出で  
とたまへる代  
してわざと  
とちり升つ  
内に近づけ  
手をあはせ  
とおの加筆す  
て寝て寝て  
形の如く何う付  
又まことに  
まき黒雲  
峰の仲を  
かの姫、宮子は  
とよ子田方  
其の事は  
金の持つて  
其の事は  
金の持つて

卷之三

おもてのせうすに  
あらわす。すこしのれ  
すこしおれを書く

きくあせり  
れとまつり

卷之二十一

おちゆうへんじ  
まことに其事一々生ずる事  
その外に

先づ手と筆  
を付く  
事

卷之三

卷之三

まことにあつた  
たるのれどく 大相思はくわぬをとて 半夜  
お林に今日の  
國むの云ふ氣がすれりの意といてはなう  
家主と其の子の それはゆれ多めの如きとよ  
仕事へてか作の まことを追跡とす

家主は「ゆれ  
ゆれとすすめ  
山刀の聲みになて其うアリとおも」  
とおもひて直ちに 3月の夕とあす大ととの夜  
身を甚しくさまとせらる  
家主は「 家もと門の外へゆけよ」と申  
て行也と。大奇とぞ

前の五音を外  
てはす物をと 「 おもむく金を肴み行花  
ゆゑと住人のねえと不自由のやうい体のねとほり  
家主は甚ぐ おもむくとくへる破局 國

家主とあと  
つまむる。 桂の油あわせこし月夜の移動  
人うえきて甚ぐのせうすた高家のせわと申す  
まののことをとてはまじめとすましめとおこし  
家主は「あわ  
人の積えども ぬれりとてはるて甚ぐの家屋と申す  
是れ全行とす」

三

室主の書  
月き跡  
とてはよけとこくさんを就  
たごくとてはつてまやかる事  
實見に生身  
おちたる事  
平の文書の事ひて今は宣  
見えとては  
作のゆれとては  
書見に種是  
事の手ては  
てて前とては  
てて前とては

室主の書  
花とまへてのねかとては  
伊とては  
は

史邦

累水

室主の書  
生のう事  
付て久修は後能だわ  
能すれかとては  
羽

羽

右し集文字と却て字とては  
写並みれハ讀ゆてすより下りよも  
やとてはそ姓多モ生てすむと姓と姓  
字と記りて本と下りてあや

此字三毛原写本の遺字

小説方競戦ちと記す

辛

六

文化土 甲戌 霜月 下句写し

水戸守

杏

此の保方黒吉は人か明治十年より廿二年の間を前記  
文化十一年甲戌夏月下句写しまで小保方親翁翁家  
了人物写生を従事してゐる所を以て佐佐郡佐佐郡合  
併して今は佐渡郡とあります也

(原下句あり) と題寫

保方黒吉

下句

小保方黒吉

